会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

IQ値とは

札幌市医師会
札幌いがらし人工関節クリニック
村上（むらかみ）　俊也（としや）

子供の頃、やんちゃだったので怪我が多かったが、何より先生のご機嫌を損なうことが多かった。品行方正に頓着できるのなら、疾うにやっているはずで、できないものはしようがない。事あるごとに母親が学校へ呼ばれるわけで、随分と迷惑をかけた。低学年の頃だった。いつものように母が帰宅して話があった。また、お小言かと思ったが、あるテスト結果の通知だった。今風に言えばメンサの入会資格を満たす好成績を告げられたという。ただ時の通信簿が優秀だった記憶はない。

IQ値が記載されたカルテを見たのは札幌肢体不自由児総合療育センター（現コドモックル）に勤務した時だった。当時、銭函の小児総合保健センターが未熟児、新生児の救急医療を担い、手稲の療育センターが乳幼児の心身、身体障害を担当していた。対象は染色体異常、二分脊髄症などの先天性疾患をはじめ、重度心身症、白質脳症や周産期異常による脳性麻痺、出生後外傷による身体障害やペルテス病などである。装具の見立て、運動療法の処方、手術などが我々の仕事である。施設には養護学校が併設されており、子供たちは全道から集まる。医食住学が揃う環境で入院生活を送ることになる。学業優秀な子もいるが、知的障害を持つ子が多い。思い返すとIQ40前後くらいの子供たちが特に可愛かった印象がある。そう感じたのは子供たちに対する差別からではない。私の能力の限界からである。子供たちは親元を離れ、集団生活を強要される。それを理解できる子もできない子も容赦はない。親の暴力が原因で障害を負った子には帰省先がない。正月も閑散とした療育センターに取り残される。対麻痺児は匍匐し、ペルテス児は尻這いし、寝返りしかできない子たちは些細な段差を乗り越えるのも苦労する。他愛のないボール転がしでさえ、この子たちには困難なのである。さらに意思の疎通も難儀である。会話の機微を共有できる子もいるが、重度障害になると冗談は通じぬ。親も子も一生、拭えぬハンディを持ちながら生きている。その姿を見るのは実に哀れであった。それでも、慰みと感じたのは、私を見つめる子供たちの笑顔。今も忘れない光彩陸離たる瞳たちであった。そういう子供たちとの関りの中で、私も学んだのである。中でも動魄したのは人間の精神はIQと反比例するということだ。嘘が無くなり、猜疑が消えるのである。世人は知識を養い、知恵を磨き、もって社会に奉仕すべしと説く。しかし、詭弁を弄し、人品を取り繕い、悪事をなす時に働くのも小賢しい知恵たちである。下手な知恵による虚飾がない子供たちには純真無垢の精神が宿る。その破顔一笑は実に天真爛漫で美しいものだ。「知恵出でて大偽あり」、「人生　字を識るは憂患の始め。名前を書ければ充分。」と古哲の言葉があるが、なるほどIQ高きがゆえに聡明なることもあるまい。はたしてIQ値とはなんであろうか。今年もコドモックルに併設されたドナルド・マクドナルド・ハウスから寄付依頼がきた。ふと、あの子供たちを思い出した。